

《実践記録》

実践記録を読んで

高橋 弘

この実践記録を書いた小林広美さんは、本学の名称が、まだ聖徳学園岐阜教育大学であった平成8年3月の国語学科卒業生である。初任校は岐阜県郡上郡八幡小。そこで3年。次いで益田郡萩原小へ移り、現在そこで4年目の勤務を終わろうとしている。

今年度、平成14年4月から全面実施となった新しい学習指導要領による小中学校教育であるが、実はその3年前から「移行措置」ということで、新学習指導要領による学習指導への対応が、各学校ごとに試みられてきていた。小林さんの萩原小4年間は、まさに移行措置から全面実施への転換の時期と重なるわけである。

指導要領の改訂によって、学習指導も含めた小中学校教育全体の考え方、内容、方法等が転換する時期に遭遇することは、一人の教師の長い教員人生を考えても、そう何度もあることではない。それだけに、新しく目指す教育の本質について考え、内容、指導方法等について教師自身が学習し、それに基づく具体的な実践研究を行っていくことは、教師の指導力を充実、発展させる絶好の機会ともなる。

小林さんの実践記録の冒頭に枠囲いしてあるその内容構成（目次）を見ると、主として小林さんの考え方を述べた—— 1. 主題設定の理由、2. 研究仮説、3. 研究内容—— と、実際の授業について述べた—— 4. 実践の事例—— との二つの部分から成り立っている。そこで目につくのは、「3. 研究内容」と「4. 実践の事例」の中の項目が両者全く同じ、ということである。

ここからは、新学習指導要領の目指す教育の具現化に向けての学校ぐるみの実践研究態勢の中であって、小林さんの、特に国語の学習指導について、新学習指導要領の願う方向、考え方と、日々の具体的な国語授業との一貫性を、十分考えることが教育現場の実践研究では重視されねばならない、との大切な受け止めがあるように思われる。

以下、この実践記録を読んで、子供達が名実ともに「学習の主体者」となるための、具体的な手立てを考える手がかりとなるのではないかと考えた二、三について述べてみたい。

(1) 学習全体の計画づくりに子供たちを参画させる活動を、新しい教材での学習を始める最初の時間に位置づけていること

小林さんは、子供が主体的、意欲的に学んでいく——自ら学び自ら考える態度

や力の育成につながる —— ために、扱う教材、単元について「子供の追求意欲が連続発展する」よう構成を工夫した指導計画にする必要があると考えた。そして具体的には、「学習の始めに、学習計画について話し合う時間を位置づけた。」

これまでの国語の学習指導では、ほとんどの場合、学習計画は教師が立案し、それに従って、教師が1時間1時間の学習活動を指示し、教師が中心となって発問し、子供に答えさせ、教師が一方的にまとめる授業を進めてきた。子供達は、「学習の主体者」と言われながら、学習のスタートの時点から、自分達の学習計画を自分たちで立てることもせず、学習の目当て、内容、活動、やり方、時間、順序等、何の見通しも持たないまま学習を始めるのが普通であった。

子供一人一人に、「自ら学び自ら考える」態度と力を育成する国語学習指導を、日々の国語の授業の中で、どのように具現化していくか —— 願い、考えと実際の授業での具体的な手立て、対応の一貫性 —— を考えたとき、本稿で提示された「学習計画」の問題は、「自ら学び自ら考える」態度と力を育成するための、新しい、具体的手立てを生み出すきっかけとなるのではないだろうか。

(2) 子供に「学習の仕方」を身につけさせ、それが活用される授業づくりへの具体的方途が提示されていること

明治以降の国語学習指導上の最大の課題は、「授業で『子供を教える』『教師の指導力』」であった。そのために、教師の指導力育成に深くかかわると考えられた「教材研究」、「教え方研究」が重視された。教材内容を「教師が」どこまで幅広く、深く読解しているか、「子供に深い読解、鑑賞をさせる」指導計画を立てられるか、1時間の授業がいちばん盛り上がる山場へ「子供をうまく引っ張って行く」教え方ができるか等、すべてが「指導にあたる教師中心」の授業の見方であり、考え方であった。そして、この「教師中心」の考え方の下、長い間かかって作り上げられてきた教師の具体的な指導の手立て、子供への対応の仕方等は、今なお教育現場の日々の国語授業に根を張っている。

『「教え方」を学ぶ』主体は教師であるが、『「学習の仕方」を学ぶ（身につける）』という言葉の主体は子供である。新学習指導要領で言う「自ら学び自ら考える力の育成」、さらには「基礎的基本的な内容の確実な定着」も含め、国語授業でのその具現化を考えた時、小林さんが本稿で提言している「子供が『学習の仕方』を学び、自分の『うでまえ』として身につける」という観点と、それに基づく具体的実践の試みは、今後の「実践研究」の方向を示唆するものとして注目に値するものである。

小林さんは、「学び方を『身につけさせる』』という言葉を使っている。一つのことが「身につく」ためには、わたしは、

- ①身につけさせたいことを、繰り返し繰り返し、かなり長期間にわたって
- ②子供が、自分で実際にやってみる体験を継続し
- ③取り組みの過程での、教師、なかま、親たちからの認め、励ましがあって
- ④自分がやったことへの成功感、成就感、満足感、充実感が味わえる

ことが必要だと考えている。

小林さんが具体的方途の一つとして挙げた ①「単位時間の学習の流れをできるだけ固定させる」は、「自ら学ぶ」ことの基礎づくり段階にある2年生の指導であり、上の①～④から考えても納得できる試みである。

また、ここで示された、「個人音読」から「振り返り」に至る学習の流れには、その根底に、高学年までを見通しての「学び方」の基本 —— ①「個人学習」→ ②「なかま学習」→ ③「個人学習」—— が考えられているのも見逃がせないことである。

これは、小林さんが次に挙げている ②「既習事項を生かして学習する」にもかかわることでもある。

身についたものは、使わなければ錆びて、ものの役に立たなくなる。新しい教材に出会い、学習を始める最初に「個人学習」を設けるのは、子供が前時までの学習の中から獲得し、身についた「学び方」を総動員して取り組む「機会」と「場」を保障し、「学ぶのは、外でもない『自分』なのだ」という意識を育てるためでもある。従って、次の「なかま学習」は、単なる発表、交流ではない。現在の自分の力で取り組んだ結果を、だれが、どの点について、どう受け止めてくれたのか、また自分は、だれの、どういう取り組みの過程と結果を、次からの「自分の学び方」として取り入れてみたいのか等々、「自ら学び自ら考える」学習の流れに位置づくものとなる。そして、最後の「個人学習」は、最初の「個人学習」との対比を行うことによって、子供自身が「自ら学び自ら考える」ことの意義と成果を考える手がかりとなるであろう。

小林さんの実践記録は、「自ら学び自ら考える力の育成を図る考え方」と「その具現を図るための『国語』の授業での実際の、具体的な手立て」とをつなぐ「実践研究」として、示唆に富むものである。今後の一層の成果を期待したい。